

「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

平成25年 2月25日（月）13:20～13:35

高崎河川国道事務所1階会議室

発言者：公述人6

■■と申します。本来でしたらここではその原案に基づく意見を述べるのが原則かと存じます。それがなんとか承知していますけれども、わたくしは、提出要綱に書きましたようにそれ以前の問題として述べさせていただきたいと思います。つまり、ダムありきによって強引につじつま合わせをし、組み上げた積み木細工のようなその集大成のようなこの原案をそのまま承認してしまいましたら、ハッ場ダム現地の脆い地質、そして先々どんな大きな災害を起こすかわからないのに、それとあと、あまり日頃表に出ていませんが、品木ダムの六合村にあります、旧六合村ですね。ヒ素問題はどうなるのかということをお前提にして話させていただきたいと思います。そういうもし事故が起きたときに国は、県は、そして皆さま方、公務員の方達はどんな責任をおとりになられるのでしょうかということが大変疑問でございます。ちょっと題は失礼ながら国交省さんということで書かせていただきましたが、昔、本当に皆さんにお世話になって色んな情報公開をとる場かなんかで、とても良くしていただいて参りました。しかしながらここ2、3年見てきた上でのことでちょっとお許し下さいませ。なによりもこの詐術にみちて、到着点がハッ場ダムをありきへの原案を強引に進めてきた国交省の体制に、本当に私、小さな人間ながらに怒りを覚えてならないんです。これってまさしく原発と並ぶ、国策という名の国家の犯罪ではございませんでしょうか。今後もこの小手先の内部権力を使って、性急にダム建設に邁進なされるのなら公務員法違反として、処罰してもらいたいぐらいのそれぐらいの怒りに燃えております。この2、3年間、国交省主催の利根川水系並びにハッ場ダム関連の会議には、一縷の望みをもって、ほぼもれなく駆けつけて参りました。検討の場、日本学術会議、事業評価監視委員会、そしてほどなく無抵抗としてまもなく打ち切られるだろう利根川・江戸川有識者会議などでした。そのどれもが単に聴きおきだけで、ちゃんとやりましたよのセレモニーでしかなく、真偽を極める会議という言葉からは程遠いものでした。最後の承認機関でしかなく、たしかに会議をもちました。国民の皆さんにも、ちゃんとパブコメをお願いしているじゃありませんか。との悪く言えばアリバイ証明のための儀式でしかないわけですよ。本日のこの場もおそらくそうでしょうけれども、そうならないことを強く切望してやみません。見聞し、味あわされた各委員会の多くは、意見を言わず、会議を長引かせないことが美德式の水面下で根回しした議員が幅を利かした地方議会と同じような、まさに裏工作で事が整った相似形でございました。それを国民の代表として選ばれた知識層が平然と行き、俗に言う御用学者の皆さん達ですけども、進行役は公僕とよばれるエリートの公務員さん達でした。日頃、これはダブリますがお世話になるお1人お1人はとっても親切で本当に私、良くしてもらってまいりました。でも、どういう扱いか、いかにして上からの命令とはいえ、集団となられるとどうしてこんなことをなされるのか、子供だつてわかるよと思うような見解をなさったんですね。失望感と共に怒りが湧きました。とりわけ腹が立ったのは、名前の響きはいいんですけど、日本学術会議、それから事業評価監視委員会。このとき本当に、国の一連の組織の出来レースというものを言葉をかみしめた次第です。単なる追認機関というよりも、もはや、お追従機関としか感じられませんでした。実際に本当に決まった時間、2時間で何ができると思います、そのうち半分は説明でした。短時間での結末を目の前にして、こんなことに税金が使われ、国民の期待を裏切

っているのかと思ったら、情けなくなっていました。2011年11月29日、その日を忘れもしません。国は、学者は、責任がとれるのですかとまさに1人で、家田東大教授、東大大学院の教授の家田委員長にかみついたこともございました。もちろんドンキホーテ並みの自分の行動に対して、その後の羞恥心と無力感は今に続きます。知識人も公務員も良い国づくりのためにあるものと信じて参りました。そんなお馬鹿さんのおばさんでした。でも、ああ、この国はこんな国だったのかと、思い知らされました。そして、見えてくる帰結点が確かな輪郭をもって、黒々と私の目にも射程距離に入ってきました。行き着く先がこの不思議な、利根川・江戸川河川整備計画の原案に結実したとしか考えられないのです。ですから、この前段階を私は選ばせていただきました。1952年の一遍の通知からいまや61年目に突入した現在、このことは看過しえませんが、八ッ場の心ある住民のお1人は、投げやりに、「いい加減なことべえしているんさあ。」っておっしゃられます。戦後60年、68年経っても、いまだ真相が暴かれ続けている戦争犯罪と同じく、きっとこんな拙速審議は、白日の下にさらされるであろうことを信じ、その一点への祈りにも似た一市民の思いでここに立たせていただいております。次に身銭を切って真実に迫ってくださっている研究者たちのたゆまざる努力にて、最近、以下の3つの事が具体例として浮かび上がって参りましたので、紹介させていただきます。いずれも人様の貴重な、大変貴重な資料で私の研究ではございませんので、でもきっとお許し下さるものと思います。きょうはお断りする時間もなくてここに駆けつけました。そして私の役目はこれらの新資料を、現地の方々にこの最前線の情報をお伝えする役柄と考えて、この13年間、足繁く八ッ場の皆様のお宅に通い続けて参りました。そんな長い歳月がございます。2点目のとして、隠し持つ全資料の速やかな開示を求めてなりません。新年早々、お配りしてございますけど、2013年1月6日、東京新聞に八ッ場ダム根拠となる経緯が書いてございます。時間の関係で、ちょっとここ割愛させていただきますが、お読みください。とにかく、1947年の9月のカスリーン台風を受けて、11月から会議が始まっているわけです。そして4回までは15,000m³/sで来たわけですね。ところが、49年2月の利根川委員会では第6回に浮上した17,000m³/sで、そこが定着してしまってこんにちに至るのです。なぜだろうかということが、推測に過ぎませんが、ダムで3,000m³/sをカットするということみたいです。これが2月14日の第8回利根川・江戸川有識者会議の席で、野呂委員さんから、東京新聞の広報部の副デスクさんだと思いましたが、から開示請求があつて、去る2月21日の6時からの第9回の席で配付資料として配布されておまして、インターネットでもご覧になられます。一応表題だけをまとめてきました。そしてこのときにこの事実を伝えた元の新潟大学教授、河川工学の学者さんである岡本芳美さんが、ジャーナリストの■■■■さんの取材過程で驚くべき事実を公表されました。2点目です。カスリーン台風によって、埼玉のカスリーン台風記念館のある東武電車の手前のところが決壊したということですよ。ところが実際にはその手前のところが300mに渡って、堤防が1mほど低かった。写真にもちゃんとでております。で、心のあるこのような研究者たちの皆さんはちゃんと現場に立って確認されるのです。ことのついでに申し上げますと、事実は違っている、現地に立てば。大熊先生達が、新潟大学の教授ですが、指摘してもいまだに群馬県玉村町を玉度町とした地図を使っちゃいます。それから高崎市内の氾濫区域はオーバーです。これはもう土地の人達に今聞けば、ちゃんと証言なさっているんですよ。それなのに委員さんは、有識者会議のメンバーは、現地へ行ってくださいと言っても、座長はじめ言葉をにごされて全然その気はないみたいです。このようなインチキデータはいずれの日にか、白日のもとにさらされているんですよ。戦争犯罪と同じだと私は思います。砂上の楼閣的に都合のよい事実を積み重ねてダム案がもっとも適切ごときこの建設案が大手をふるって来たわけですよ。いかにもものわからないおばさんでも、この2年間にじっとみて来ますと思わざるを得ま

せん。ともかくいたずらな細工を止めて、持っている資料の全開示を求める次第です。政治家がダメならば、せめて国交省の優秀なる職員さん達が、倉庫に眠る資料を提示してくだされませんか。そして、3点目として、同じくこの緊急課題として八ッ場現地の地質の脆さと、そしていまだにどんどん積もる一方のヒ素問題があります。地質学者の、最近出た本ですが、これが、「ダムをつくらない社会へ」という本で。その中で、■■■■さんという高校の教師をなさっていた方が、■■さんという大学の先生と一緒に、現地を丹念に歩かれて、そしてこの地質の問題を追ってらっしゃいます。そうしますと、最初の頃はちゃんとどんなに危険かというデータがあったそうなんです。ところが2回目から業者さんが全くそれを隠していまだに出でこないそうです。報告書は今や安全性を謳い上げた報告書に変わっているわけです。なんていいましたかね。調査会社ですね。先日、私たちは、群馬県の高教組におきまして■■さんが会員としてパワーポイントを使って、本当に事細かな綿密な発表をされたんです。それをみて、本当におそろしくなりました。今、大丈夫と言われている打越の代替地は大変危険です。それから対岸の林地域は50年くらいの間には全部沈むそうです。水を貯めたらおしまいなんですよ。ただし、今は危険性を確かに国交省さんの方も存じ上げているらしくて、丁寧な工事をなされるそうですけれども。なんであんな何百年もかかってみんなが絶対に住まなかった。安全な土地というのは、今の川原湯温泉街のあのくねくねしたあの上だけがの崖状のものになっていて、あの地質は安定しているそうです。あと2分ありますよね。そして、そういうことを知って、本当に私たちこれを現地の人に知らせなければと思います。■■さんが発表できたのは教師を辞めたからです。というのは、■■さんが、県立高校にいたときには嫌がらせの電話が大変掛かって来たそうです。ですから、■■さんは、3年前に定年を待たずして辞めています。そういうような圧力って、これが本当にこの国なんだろうと思うと情けなくなります。そして、このことを現地の人に伝えました。「そんなの俺たち知っているよ。」とおっしゃいました。「最初は国交省はさ、説明会の時には危険だ、危険だ。」と言っていたそうです。今70代の方は覚えていらっしゃいます。ところが「今は、言わないんだよ。」実際、そこの人達は身をもって、毎日みている山であって、毎日歩いている道ですから、どこがどうすべったか家族の歴史として、知ってらっしゃいますよ。そして肝心のヒ素問題ですが、これは紙面の関係上、割愛して本当にちよっとさわりだけ言わせていただきます。ヒ素問題について私もこちらの方に書きました。それは皆様もご存じのように八ッ場ダムの計画が立ってみたらpH2という五寸釘が1週間で針金のようになる。この酸性のために15年間頓挫したんですね。その間に県の■■という■■さんが密かに八ッ場、これはどこかに政治の力がかかっていると思いますが、八ッ場ダムは至上命令として、そして世紀の大発見になる石灰投入。今では1日60t入れています。そして年間維持費が10億、3年前に聞きましたら9億に下がったと、品木ダム水質管理所が言っていたらっしゃいましたが。とにかくこれです、八ッ場の皆さんが書いて送ってくれたものです。こういう思いを知ってよろしく願いいたします。

以上